

## テサロニケ人への手紙第二2章7節 「不法の秘密」

### 1A 不法を行う人々

1B 理屈に合わない行動

2B 自分にもたらす滅び

### 2A 不法を愛する人々

1B 善と悪の逆転

2B 魔術による惑わし

### 3A 真理を受け入れない人々

1B 真理はないとする偽り

2B 全てを救うために来られた方

3B 家を建てる者が捨てる要石

### 4A 似非を信じる者たち

1B 自分の名で来る者

2B サタンの働きによる到来

1C 引き止める者の除去

2C 悪の体現

### 5A 不法の者

1B 人々の偶像礼拝

2B 欲望を満たす不思議と力

3B 神への冒瀆

### 6A 不法の滅び

1B 悪の勢力のための火の池

2B 不法を喜ぶ者たち

## 本文

テサロニケ第二 2 章を開いてください。私たちの聖書通読の学びは、テサロニケ第二 1 章まで来ましたが、今日、午後礼拝で 2 章を一節ずつみていきたいと思います。今朝は、2 章 7 節に注目します。「**不法の秘密はすでに働いています。ただし、秘密であるのは、今引き止めている者が取り除かれる時までのことです。**」不法の秘密などという、ちょっと響きの良くない言葉が突然、現れました。2 章は、教会では普通、あまり語られないことを教えています。前回、私たちは、主が再臨される時に、神を知らない者、福音に従わない者たちを罰して、永遠の滅びに至ることを学びました。それだけを聞くと、なんと神はひどいことをする！と思ってしまいます。けれども、神は決して、人々が滅びることを望んでおられません。もし、人が永遠の滅びに至るなら、それは自らそれを選び取っているからそうなります。語弊を恐れずに言うならば、「喜んで」その滅びの道を選ぶのです。

自由意志を尊重しなければいけない神は、彼らが滅びゆくにさせなければいけない、という厳しい現実が、神の裁きに現れています。そのことについて、じっくりと見ていきます。

## **1A 不法を行う人々**

### **1B 理屈に合わない行動**

不法の秘密について、まず言えることは、人というのは不法に対して、異様な興味があるということです。主の恵みにあずかることは、道理にかなっているです。主は、イザヤ書の中で、「イザ 1:18 さあ、来たれ。論じ合おう。——【主】は言われる——たとえ、あなたがたの罪が緋のように赤くても、雪のように白くなる。たとえ、紅のように赤くても、羊の毛のようになる。」と言われました。主は、罪を赦したいと願っておられ、すぐにでもすべての罪を清めたいと願われています。清めていただきたいと思うはずですが、しかし、人はそれでも罪を犯し続け、理屈に合わないことを行ってしまいます。

### **2B 自分にもたらず滅び**

こんなことをしたら明らかに自分を滅ぼしてしまうようなことを行ってしまいます。箴言 7 章には、若者に対して知恵がよく聞きなさい、と勧めているところがあります。「7:4-5 知恵に向かって「あなたは妹だ」と言い、英知に向かって「身内」と呼べ。自分をよその女から守り、ことばの滑らかな、見知らぬ女から守るために。」そして、その身知らぬ女は夫がいるのに、出張中に、その若い男をくどいて、夜を一緒に過ごそうと誘います。そして彼は、直ちに、牛が屠り場に行くように彼女の後についていきます。「7:23 最後は矢が彼の肝を射抜く。それは、自分のいのちがかかっているのを知らずに、鳥が罠に飛び込むようなものだ。」

## **2A 不法を愛する人々**

### **1B 善と悪の逆転**

そして、人は、自分が不法を行うだけでなく、その不法が良いものだと偽ります。心の中でその不法に同意するのです。(ロマ 1:32)さらに、悪いものをよいとして、良いものを悪いものだとして高ぶります。イザヤが預言して、そのことを嘆きました。「イザ 5:20 わざわいだ。悪を善、善を悪と言う者たち。彼らは闇を光、光を闇とし、苦みを甘み、甘みを苦みとする。」世の中が今、悪いものは悪いのだということができません。そして良いこと、正しいことを語ると、それがいかに悪いことであるかとそしります。

### **2B 魔術による惑わし**

このようにして不法が、あたかも良いものとしてまかりとおるようになり、人々の良心は麻痺して、まったく幻想のように違うものを見ているようになります。終わりの日に、主は、大バビロンと呼ばれる大きな都を滅ぼされますが、そのことについて御使いは、人々が魔術にかかっていると、「黙示 18:23-24 ともしびの光も、おまえのうちで、もはや決して輝くことはない。花婿

と花嫁の声も、おまえのうちで、もはや決して聞かれることはない。というのは、おまえの商人たちが地上で権力を握り、おまえの魔術によってすべての国々の民が惑わされ、この都の中に、預言者たちや聖徒たちの血、また地上で屠られたすべての人々の血が見出されたからである。」

ここの「魔術」の言葉は、薬物を使って幻覚を見ているかのような意味合いになっているのです。ちょうど、麻薬を常習して、ないものがあるもののように見てしまっ、あるものが見えていないというような状況です。

黙示録の啓示をヨハネが受けている時に、ローマ帝国では、コロッセウムに代表される競技場がいろんなところでありました。ローマには、人々の不満を解消するために、「パンとサーカス」ということをしました。つまり、基本的な食糧が事欠くことがないようにすること。そして、もう一つがサーカス、つまり、エンターテイメントです。皇帝も共に競技場で庶民とともに鑑賞します。その時は、庶民も皇帝も観客ということで平等なのです。そこで何が行われたか？という、一人が相手を殺すまで戦う格闘技、グラディエーターが行われました。そして、北アフリカなどから連れて来た、ライオンなどの野獣が解き放たれます。そしてグラディエーターが戦うのですが、多くは喰い殺されます。そして、その中にキリスト者たちもいたのです。キリスト者たちが、ライオンに喰い殺されているのを、エンタテとして観ていたのです。こうやって娯楽や贅沢にふけりながら、聖徒たちの血を流すということ、これが催眠術のような魔術でなくて何でしょうか？

### 3A 真理を受け入れない人々

このように真実が見えなくされているということが、不法の秘密であります。

#### 1B 真理はないとする偽り

パウロは、彼らが惑わしと偽りの中にいるのは、「真理の愛を受け入れなかったからだ」と言っています。「2:10 また、あらゆる悪の欺きをもって、滅びる者たちに臨みます。彼らが滅びるのは、自分を救う真理を愛をもって受け入れなかったからです。」取っています。福音の真理を受け入れないので、それで偽りを信じるままになっているということです。

前世紀から今世紀に入っの大きな違いは、「真理が押し潰されている」ということです。昔から、そうだったのですが、今日は顕著です。パウロが、「不義によって真理を阻んでいる人々のあらゆる不敬虔と不義に対して、神の怒りが天から啓示されています。」と言っています(ロマ 1:18)。真理というものはない、とうそぶいています。そういった思いはさらに過激になり、客観的な事実は存在しない。一人一人の思っていること、感じていることに真実があるのだ、とするのです。「真理はそれぞれ一人一人の心の中にあり、客観的な真実はない。」とすると、福音の真理である、イエス・キリストの復活の歴史的事実はなかったこととなります！

この世界にあるすべてのことが、あるかどうか分からないという、不確かなものになります。今、見ていること、聞いていること、手にしていることも、それが確かなものか分からなくなります。そして、自分の思っていること、感じていることが真実なので、それぞれが自分の思っていることが正しいとして、激しい対立が起こっています。客観的事実や真実があれば、それに基づいて歩み寄ることができますが、全く接点がないので激しく対立するしかなくなるのです。

### 2B 全てを救うために来られた方

私たちが福音の真理を語る時、つまり、イエス・キリストの御名にこそ救いがあると伝える時に、「なんと偏狭な教えだ！いろいろな考えがあって、それで世の中うまくいくのだ。」という返事が返って来ることが多いです。そのようなことを言っている人は、イエス・キリストを他の人間や宗教と同列にして考えているために、そう感じるのです。すべての人が罪人だという時も、「こんなに善良な人も、罪人で神から裁かれるというのか！」と怒り出すことがあります。

けれども、福音の真理というのは、だれかとだれかを比べるようなものではありません。どんな善良な人でも、心にある悩みです。良い人であっても、悪い人であっても、自分のうちにある後ろめたさです。「ロマ 2:16 私の福音によれば、神のさばきは、神がキリスト・イエスによって、人々の隠された事柄をさばかれる日に行われるのです。」このように、隠された事柄なのです。自分のうちにある矛盾や、苦しみ悩みに立ち向かう、そういった秘めたところに神が見ておられます。そして、だれが見ていなくとも、自分が神に対して罪を犯していると知ることから始まっています。

だからこそ、どんな人にも与えられた救いなのです。ある特定の人のためにイエスは来られたのではなく、人間が人間である限り持っている負い目のために、主ご自身がその負い目を身代わりに背負ってくださったことによって、血を流されたことによって、罪を清め、御霊によって新しくしてください。この福音の真理を愛する、つまり、喜んで受け入れる人が救われるのです。

### 3B 家を建てる者が捨てる要石

このように、不法の秘密というのは、人々が敢えて、自分たちにとって救いとなるものを拒み、自ら滅びを招いているというところに働いていることが分かりました。これが、ユダヤ人の宗教指導者の中で起こりました。「ヨハ 1:10 この方はご自分のところに来られたのに、ご自分の民はこの方を受け入れなかった。」とあります。最も皮肉、実に残念な預言があります。「マルコ 12:10 家を建てる者たちが捨てた石、それが要の石となった。」建物に絶対に必要なのは、要の石です。要石がなければ、家はすべて崩壊します。ですから、家を建てる者たちにとって、最も大切なものです。ところが、家を建てる者たちがかえって、その要石を捨ててしまいました。しかし、その皮肉をも神のご計画の中にあり、彼らが捨てたことを神は見据えて、この方を人々の罪を背負う、神のしもべとしてくださったのです。

## 4A 似非を信じる者たち

### 1B 自分の名で来る者

しかし、自分たちのメシア、救い主を拒んだ代償は来ます。それが、偽メシア、反キリストです。テサロニケ第二 2 章では、「不法の人」と呼ばれています。イエス様が言われました、「ヨハ 5:43 わたしは、わたしの父の名によって来たのに、あなたがたはわたしを受け入れません。もしほかの人がその人自身の名で来れば、あなたがたはその人を受け入れます。」イエス様は、父の名で来ましたが、彼らはそれを神への冒瀆だしました。しかし、もしすべてが冒瀆ならば、メシアが来たのであれば、どのようにして受け入れることができるのでしょうか？それが、自分自身こそが神であるというもの、自分自身の名を高く上げる者がきたら、受け入れるということです。

ゼカリヤは、メシアが時の羊飼いたち、つまり指導者たちに拒まれることを預言しました。まことのメシアが、銀三十シケルで売られることも預言しました。まことのメシアを拒むので、次に現れるのが、「愚かな牧者」といいます(11:15)。愚かな牧者はこのようなことをします。「11:16 見よ。それは、わたしが一人の牧者をこの地に起こすからだ。彼は迷い出たものを尋ねず、散らされたものを捜さず、傷ついたものを癒やさず、衰え果てたものに食べ物を与えない。かえって肥えた獣の肉を食らい、そのひづめを裂く。」羊飼いは養うのがその仕事なのに、かえって羊たちを蹴散らすことをすると言っています。まことの羊飼いを受け入れなかったので、愚かな羊飼いを受け入れるのです。

ダニエル書 9 章では、その者が多くの者と堅い契約を結ぶけれども、その半週後、つまり三年半の後に、いけにえを献げることをやめさせるとあります。ユダヤ人がメシア、自分たちを救うと思っていた人物が、彼らを全滅させるべく動く恐ろしい人物なのです。パウロは 2 章で、ダニエル書 9 章や 11 章に基づき、またイエス様のオリーブ山での話に基づき、こう告げます。「Ⅱテサ 2:4 不法の者は、すべて神と呼ばれるもの、礼拝されるものに対抗して自分を高く上げ、ついには自分こそ神であると宣言して、神の宮に座ることになります。」時のユダヤ人指導者は、イエスを神への冒瀆だと裁きましたが、その人物を受け入れたことによって、本物の冒瀆が行われます。

## 2B サタンの働きによる到来

### 1C 引き止める者の除去

主は、私たちがいつも憐れんでおられます。このような不法の秘密が秘密ではなくなり、完全に現れるのを引き止める働きをされます。しかし、取り除く時も定めておられます。まだ取り除かれていない時、引き止めている時に、その神の憐れみの中で人々が悔い改めて、救われることを願っておられます。ノアの時代、人々の悪が増大して、その心に凶ることがみな、いつも悪に傾いていた時に、主は言われました。「創世 6:3 わたしの霊は、人のうちに永久にとどまることはない。」この「とどまる」という言葉、ヘブル語は、「さばく」「訴える」そして「争う」という意味合いがあります。つまり、「わたしの霊が、あなたがたに『間違っているぞ』と語ることは、いつまでも続くことはない。」

とされているのです。

主はご自身が戻って来られるまでは、神の国が来ないことを知っておられます。それまでは罪がこの地上から取り除かれぬことを知っておられます。けれども、神はその間も、不法が完全に現れることがないように、抑制する働きをしてくださっています。その一つが、上からの権威ですね。悪に対して剣をもって罰する権威を、支配者などに与えておられます。それによって、完全に悪が現れるのことに歯止めをかけているのです。けれども、人々が何度となく、その歯止めを取ろうとします。そして、ちょうど水が堰を切って決壊するように、歯止めが取り除かれる時があるのです。ダニエル書 7 章には、獣は「時と法則を変えようとする。」とあります (7:25)。

「ただし、秘密であるのは、今引き止めている者が取り除かれる時までのことです。」と本文にありました。今、引き止めている者とは、だれの事でしょうか？今の時代、引き止めているのは、まぎれもなく、聖霊の働きです。聖霊が世に対して誤りを認めさせ、罪について、義について、裁きについて誤りを認めさせるということを、主は弟子たちに語られました。私たちが、罪を悔い改め、神に立ち返ることができたのも、御霊の働きです。自分の行いではなく、全くの神の憐れみによって、御霊の洗いによって、初めて悪に抗うことができます。自分のうちに葛藤が起こりますが、それは御霊が引き止めてくださっているからです。

## 2C 悪の体現

しかし神は、それを取り除く時を定めていると言われます。これが、主の裁かれ方です。ダムにひびが入っていて、それを必死に抑えている人がいるとします。その人を、周りの人々が、「お前は邪魔だ、よけてくれ」と言い寄ります。しかし、自分を信じて、下流地域にいる人々が逃げていきました。逃げた人々が十分にいることを確認してから、その人はその場から立ち去るとします。そうして、一気にダムが決壊し、残された人々が次々と滅ぼされます。そういった働きを、主は御霊によって行われているのです。

主が、今のように御霊によって人々にキリストを示し、悔い改めて神に立ち返ることができるようにする時は、いつまでも続くことはありません。いつか、取り去られます。それが、主が、教会のために来られる時です。携挙の時です。教会を通しての、御霊による証しが終わる時です。そうすれば、不法の人は正体を表します。8 節を見てください、「その時になると、不法の者が現れますが、主イエスは彼を御口の息をもって殺し、来臨の輝きをもって滅ぼされます。」

## 5A 不法の者

### 1B 人々の偶像礼拝

不法の人について、サタンが彼に自分の位、力、権威を与えることを、黙示録 13 章は教えています。そして、人々が彼をあがめることが書かれています。「13:3-4 その頭のうちの一つは打た

れて死んだと思われたが、その致命的な傷は治った。全地は驚いてその獣に従い、竜を拝んだ。竜が獣に権威を与えたからである。また人々は獣も拝んで言った。「だれがこの獣に比べられるだろうか。だれがこれと戦うことができるだろうか。」人々が拝むのです。なぜ、そんな人を拝むことができるのか？と思うでしょう。

けれども、人は根本のところでは偶像礼拝をしたいのです。自分の欲していること、願っていることをそのまま体現するのが偶像です。聖書に出てくる、神々と呼ばれるものは、人の欲することをそのまま表象しているものです。ですから、そのやりたい放題のことをする不法の人に、自分自身を投影させるのです。

### 2B 欲望を満たす不思議と力

9-10 節にはこうあります。「2:9-10a 不法の者は、サタンの働きによって到来し、あらゆる力、偽りのしるしと不思議、また、あらゆる悪の欺きをもって、滅びる者たちに臨みます。」力を持っています。しるしと不思議を行うことができます。自分が今まで押さえつけられていた欲望を、この男は不思議としるしで、また力をもって達成してしまうのです。

### 3B 神への冒瀆

そして不法の人は、あからさまに神を冒瀆します。「13:6 獣は神を冒瀆するために口を開いて、神の御名と神の幕屋、また天に住む者たちを冒瀆した。」自分の上に神がいることを拒む人々にとっては、彼は自分たちを代表している者なのです。だから、賛辞を送ります。

### 6A 不法の滅び

しかし、主が来られます。「2:8 主イエスは彼を御口の息をもって殺し、来臨の輝きをもって滅ぼされます。」不法の人は滅ぼされるのです。黙示録 19 章によると、生きたまま火と硫黄の燃える池に投げ込まれます。そして、悪魔は底知れぬ所に鎖で縛られて、千年後に解き放たれますが、主はサタンを同じく、火と硫黄の池に投げ込みます。

### 1B 悪の勢力のための火の池

そして次からが、大事です。ゲヘナというのは、そもそも人のために神が造られたのではない、ということです。「マタ 25:41 それから、王は左にいる者たちにも言います。『のろわれた者ども。わたしから離れ、悪魔とその使いのために用意された永遠の火に入れ。』悪魔とその使いのために用意されたものだと、はっきり主は言われています。

### 2B 不法を喜ぶ者たち

では、なぜ永遠の滅びに人々は至るのでしょうか？今、見て来たとおりです。福音の真理への愛がなかったこと。それで、サタンの偽りを自ら受け入れ、不義を喜んでいたことがあります。主は、

引き止めるお働きをしていましたが、それがいつまでも続くわけではありません。人の高ぶりに対して、究極に高ぶり、神を冒瀆する不法の人が現れるのをそのまま許されるのです。そのことによって、彼らが自分たちの喜ぶ不法を楽しむままにされるのです。それで、本来、行く必要もなかった、永遠の火の中に自ら入って行くような決断をします。自分で選び取り、不法を喜んでいなければ、地獄には行けないのです。

神が愛ならば、なぜこんな災いを下すのか？という前に、私たちが問わなければいけないのは、「なぜ、自分は自分を滅ぼすと分かっているのに、不法や闇を愛しているのか？」ということであります。神は私たち一人一人を愛し、私たちが自らを滅ぼすところから救い出したいと願われています。罪を憎み、善を求めましょう。光がすでに世に来ました、イエス・キリストです。この方にあっては、決してつまずくことはありません。